称号及び氏名	博士（人間科学） PATHAK RAMESH PRASAD
学位授与の日付	2024 年 3 月 31 日
論　文　名	ネパールにおける解放債務労働者の生活変化 ーカマイヤのライフストーリー研究の事例から
論文審査委員	主　査　酒井　隆史
	副　査　伊井　直比呂
	副　査　宮脇　幸生

論文要旨

本研究では、ネパールにおける解放されたカマイヤの生活状況に焦点を当て、解放前後の経済、社会、教育、職業などの面での変化を探求した。研究の序章では、カマイヤとは何か、その背景、解放の経緯、そして解放されたカマイヤの現状について概説した。

第 1 章では、カマイヤに関する既存の研究をレビューし、ライフストーリー研究法の採用を紹介した。また、研究の意義や範囲について述べ、本論文で解明すべき課題を導き出した。カマイヤに関するライフストーリー研究はほとんど存在せず、近年カマイヤに関する研究は減少傾向にあることもあきらかになった。

第 2 章では、カマイヤ制の概念的な枠組みを整理することに集点当てた。カマイヤ制の概念整理を試み、奴隷制、債務労働制など関連概念詳細に論じた。先行研究におけるカマイヤ制に対する定義の統一性の欠如をあきらかになった。研究者間で「奴隷制」「農奴」「債務労働」「奴隷的労働」といった多様な用語が用いられているが、これらの用語を用いる際の基準が明確ではないため、カマイヤ制の多様性に対する理解が複雑化している。これはカマイヤが置かれている個別の状況は、地域や地主によって異なることがカマイヤ制の形態の多様性や研究者は所属する機関の目的や方針の影響を受けることに起因すると考えられる。さらに、研究者が異なる概念を用いる背景とその文化的、社会的影響について探求した。研究者の所属する機関や民族的背景がカマイヤ制の概念化に影響を与えていることも確認された。例えば、反奴隷制や人権活動に関わる機関に所属する研究者は、カマイヤ制を「奴隷制」と位置づける傾向にある。対照的に、特定の機関に所属しない研究者は、カマイヤ制の概念を個別に集点当てて検討する必要があると指摘している。

第 3 章では、カマイヤ制の歴史背景について詳しく 検討した。はじめに、カマイヤ制の始まりに関して、タルー人がいかにしてカマイヤとなったのかを検討した。特に、マラリア地域であるタライ地方のタルー人の居住の歴史や、山岳地帯からの住民の移動に焦点を当てた。タルー人が土地を失い、農業労働者としてのカマイヤになる過程と、その原因

が山岳地帯からの移民によるものなのか、タルー人の文化や習慣に起因するのかを検証した。これらの問いへの答えを探るために先行研究を幅広く調査した。その結果、カマイヤ制の成立に直接的な影響を与えたのは、 1950 年以降の山岳地帯からの大規模な移住、土地改革（土地再分配)、政府による王やラナ政権の親族、貴族、軍隊など「ビルタ地」としての土地分配と地籍調査の実施（土地登記制度の確立）であることを あきらかに した。

第 4 章では、 2 つの異なる郡における現地調査の結果を紹介し、各地域の基本情報、人口、民族構成、文化的背景、経済活動、教育や医療へのアクセス、社会構造などを概説した。Muktinagar 集落では、市場への近さや交通の便利さが特徴で、基本的な公共施設が整っているが、タルー人の伝統的な社会構成や文化が失われつつある。一方、Janatanagr 集落は主にタルー人が住み、伝統的な社会組織と文化が保持されているが、近代化の影響により若い世代の間で他民族との交流が増えている。両集落の比較から、地域によって異なる社会的、文化的影響が確認された。

第 5 章では、解放されたカマイヤの生活環境についてインタビューを基に分析した。解放前、多くのカマイヤは学校のない集落に住んでおり、医療アクセスも限られていた。経済的困難と伝統的価値観により、多くの若者が教育を受ける代わりに労働を強いられていた。また、医療設備の不足と伝統的治療法への依存が、病院へのアクセスが困難な環境での生活を反映している。さらに、カマイヤは土地や家を所有せず、地主の支配下で制限された生活を送っており、政府からのサポートも期待できない状況であった。これらの条件は、カマイヤたちが公的サービスへのアク セスが限られ、地主や伝統的社会構造に依存する不利な状況に置かれていたことを示している。

第 6 章では、解放されたカマイヤの私生活、階級構造、借金の問題、労働状況について分析した。カマイヤ制内で地主、カリンダ、アグワ、カマイヤの四つの階級が存在し、それぞれの役割と相互関係が明らかにされた。カマイヤになる背景には、家族の状況、土地所有の欠如、借金など様々な要因があった。借金はカマイヤと地主の依存関係を深める一方で、全てのケースで借金が増加し続けるわけではなく、脱出の事例も確認された。カマイヤと地主の関係は、地主の性格や態度によって異なり、過酷な労働環境下での生活が描かれている。カマイヤを置かれている労働条件は厳しく、少ない報酬で長時間労働を強いられていたことが指摘された。また、カマイヤに置かれている条件、カマイヤの対する報酬、地主とカマイヤとの関係も地主や地域によって異なることもあきらかになった。

第 7 章では、カマイヤ制もとでの女性と児童の労働に焦点を当てている。女性は幼少期から労働に従事し、教育機会がほとんどなく、地主の家事や農作業に従事していた。無償での労働が一般的で、性的な暴力や言葉の虐待も報告されているが、インタビュー対象の女性は性的暴力を経験していないものの、言葉の暴力は頻繁にあったと述べている。カマイヤ制の下での状況は地主によって異なり、良心的な地主もいればそうでない地主もいた。報酬に関しても、無償で働いている人がいる一方で、報酬を受け取っている人もい

た。つまり、女性（ブクラヒ）の労働環境は地主の態度によって異なることが確認された。

児童労働に関して、カマイヤの子どもたちは非常に若い年齢から働き始め、成長に伴い労働の種類や役割が変わって いった 。経済的、時間的余裕がないため、学校教育より労働が優先されていた。しかし、労働に対する賃金が支払われることは稀で、多くの子どもたちは食事や衣類の提供のみを受けていた。子どもたちにはほとんど遊ぶ時間がなく、遊べる時間は夜やヤギを飼いのときだけであった。さらに、子どもたちはしばしば暴力にさらされており、カマイヤ制もとでの女性と子どもたちは非常に脆弱な立場に置かれていることがあきらかになった 。

第 8 章では、解放後のカマイヤの生活状況に焦点を当て、特に教育、医療機関へのアクセス、労働状況、居住環境について詳しく論じた。解放後のカマイヤの労働環境に関して、彼らは職業を自由に選ぶことができるようになった。その結果、彼らは農業、日雇い労働（農業、建築)、政治家、公務員、軍隊、管理人など、幅広い職業に就いていることがあきらかになった。現在解放カマイヤの労働環境は改善され、様々な職種に就く自由が得られたが、安定した収入の確保や遠方への移動が課題として残っている。教育アクセスは向上し、多くの子どもが学校に通い、教育 への意識も高まっているが、中退率の増加や高等教育への進学にはまだ障壁がある。土地や住居に関しては、政府や NGO からの支援により状況が改善され、自分たちの家を持つことができるように なった が、不十分な支援や土地の面積、安定した収入源の不足などの問題も指摘されている。全体として、解放カマイヤの生活は向上しているが、教育、就労、居住環境の各面でまだ解決すべき課題が存在 していることは確認された。

第 9 章では、本論文を通じての総合的な考察をおこなった。解放カマイヤの生活には社会的、経済的な面で大きな変化が見られるものの、安定した収入の確保が難しい、政府から提供された土地が不十分である、教育へのアクセスに関する問題の改善が見られる一方で、中退の問題など未解決の課題が存在していることがあきらかになった。これらの問題を解決するためには、政府が解放カマイヤの現場からの生の声を聞き、彼らのニーズに合った支援政策を実施する必要があると考えられる。

終章では、結論として、解放カマイヤの生活状況には大きな変化があった一方で、先に述べたような様々な問題が存在することがあきらかになった 。現在、カマイヤに関する研究や支援はほとんど行われていない状況が確認できた。これらの問題を解決するためには、カマイヤの現在の生活状況を把握できるような研究や、政府や NGO などによる長期的な支援政策が必要であると考えられる。

今後の課題としては、本研究の方法論の範囲とその限界を踏まえた上で、解放カマイヤでありながら全ての支援を受けられなかった理由や、未だに解放カマイヤとして認められていない人々が認められなかった理由、そして彼らの現在の生活状況などを詳細に調査することを提案したい。

初出一覧

序章

（書き下ろし）

第 1 章 先行研究および方法論の整理

（書き下ろし）

第 2 章 「カマイヤ制の概念的位置づけに関する考察－債務労働 Bonded Labor と奴隷制 Slavery n のはざまで―」、人間社会学研究集録 15、大阪府立大学院、人間社会システム科学研究科、2019、3-28（査読あり）

第 3 章 「ネパールにおけるカマイヤ制の歴史的背景について」、人間社会学研究集録 16、大阪府立大学院、人間社会システム科学研究科、2020、3-29（査読あり）

第 4 章 現地調査地概要

（書き下ろし）

第 5 章 カマイヤの公的な制度・機関との関係

（書き下ろし）

第 6 章 カマイヤの私的な生活

（書き下ろし）

第 7 章 カマイヤ制における女性ヤ子ども労働実態

（書き下ろし）

第 8 章 解放カマイヤの解放後の労働及び生活実態

（書き下ろし）

第 9 章 考察

（書き下ろし）

終章

（書き下ろし）

学位論文審査結果の要旨

学位論文審査委員会

学位論文提出者氏名　パタク・ラメス・プラサッド（PATHAK RAMESH PRASAD）
学位論文題目　ネパールにおける解放債務労働者の生活変化－カマイヤのライフストーリー研究の事例から

本学位論文審査委員会は、人間社会システム科学研究科人間科学専攻の博士論文審査基準に照らして厳正な審査を行い、以下の評価と結論に至った。

審査委員会　第１回　2024 年　２月 16 日（金）12 時 00 分 -13 時 00 分
第２回　2024 年　２月 21 日（水）15 時 30 分 -16 時 30 分
第３回　2024 年　２月 26 日（月）10 時 30 分 -11 時 00 分

１）研究テーマが絞り込まれている。

本論文は、1960 年頃にあらわれ 2000 年に公式に廃止されたネパールのタライ地方に存在した「債務労働制」である「カマイヤ制」について、その制度の実態と解体以降の変容について、かつてカマイヤであった人々へのインタビュー調査を主要に据えて浮き彫りにし、それを通して現代ネパール社会の抱える課題をあきらかにしようとする試みである。本論文の展開は、以下のようになる。1）カマイヤ制とはどのようなシステムであったのか、先行研究がどのように位置づけてきたかを検討し、本論文で採用される定義を確定する。2）カマイヤ制の成立を歴史的な複数の脈流をたどることで解き明かす。3）解放カマイヤへのインタビュー調査から、かつてのカマイヤ制の実態を描きだす。4）同じく解放カマイヤへのインタビュー調査から、カマイヤ制解体以降の生活の変化の実態を描きだす。このような展開からあきらかなように、本論文の試みは一貫しており、設定した目的に沿った適切なテーマのもとに展開されている。以上から、研究テーマは十分に絞り込まれている。

２）論文の方法論が明確である。

本論文の議論のプロセスは以下のようになる。まず、カマイヤ制にかんする既存の社会科学的研究のサーヴェイから、それがどのようなシステムかをあきらかにし、そのうえでカマイヤ制成立の歴史的経緯を説明する。つぎに、この基礎的考察を土台とし、解放カマイヤに対しておこなったインタビュー調査を「ライフストーリー」の手法によって記述し分析する。さらにこれらの議論を通して、解放前から解放後にかけてのカマイヤの生活の変化をあきらかにする。以上のように、論文の方法論は明確である。

3）研究テーマについての先行研究調査を十分におこなっている。

従来のカマイヤ研究について、多様な立場の研究者や諸機関による文書を、歴史、政治、経済、社会、政策の諸領域を広範囲に渉猟し、注意深い目配りをおこなっている。その整理の明確性についてはやや不満が残るものの、以上のように、先行研究調査については十分である。

4）研究の素材となる基本文献、資料、調査データを十分に吟味している。

本論文は、2022 年 11 月に約 1 か月間、2023 年 3 月に約 3 週間にわたり、2 つの集落の 23 名に対しておこなわれた解放カマイヤ本人へのインタビューを通じてえられた質的データを「一次データ（Primary data）」、先行研究の調査資料や政府の統計データなどを「二次データ（Secondary data）」と位置づけ、双方ともに十分な吟味をおこなっている。

5）研究テーマについて、先行研究にはないあたらしい知見を打ち出している。

本論文の提示したあたらしい知見については、まずなによりも、1）先行研究の乏しい解放カマイヤの現在の状況について、二つの地域における当事者へのインタビュー調査を介してあきらかにしている。さらに、2）インタビュー調査を通して、まずかつてのカマイヤ制そのものについて、先行研究にはない複数の知見をえている。2－1）かつての研究では地主とカマイヤのあいだの関係において捉えられがちであったカマイヤ制が、実は多くがそのうちに二つの仲介の層を介入させた複雑なものであったこと、2－2）かつての研究がしばしばカマイヤ制をタルー人とパハリ人のあいだの民族問題と重ねがちであったところで、カマイヤと地主（パハリ人だけでなくタルー人ふくまれる）のあいだには複数の条件の差異にもとづく多様性があったこと、それゆえ、民族問題とは重ねられないこと、2－3）カマイヤのおかれた状況やその境遇（たとえば地主との関係が良好であるか否か）にも、かなりの幅で多様性があったことなど。3）さらに解放後の元カマイヤのおかれた状況についても、たとえば、近代的医療制だけではなく伝統的な儀礼的医療もいまだ利用されつづけていること、地域によってタルーの伝統文化や慣習の継承性において差異があること、などという発見があった。4）複数の学問領域における旧来のカマイヤ制の定義についても、その不十分さを裏づけのあるかたちで示し、より複雑なものにする必要を提起している。またつけくわえておけば、論者のインタビュー調査は、かつてカマイヤだった人々の声や生活の記録を後世に残すという点でほとんど類をみない試みであり、今後、それが学術的にも実践的にも有益な資料となることはうたがいない。以上のように、目標の設定に十分に見合う成果が多数、提示されていることはあきらかである。したがって、研究テーマについて、先行研究にはないあたらしい知見の提示という点でも、申し分ない。

6）その知見を裏づけるための、必要にして十分な議論と実証が展開されている。

本論文は、「一次データ」と「二次データ」を組み合わせながら、みずからの知見を丹念に裏づけている。カマイヤ制の解体にいたるまでの経過や、そのプロセスへのカマイヤたちの参加状況の説明、あるいは、カマイヤ制の従来の定義に変わる独自の定義のより発展的な提起などにやや不満は残るものの、本論文には、総じて精力的な読解と緻密な論証にもとづいた議論の展開が確認でき、あたらしい知見は必要かつ十分に裏づけられている。

７）当該分野の研究領域にあらたな地平を切り開く、独創性を備えた論文である。

本論文は、解放カマイヤの生活状況という観点からも、カマイヤ制研究という観点からも、タルー人の現代史という観点からも、現代ネパール史という観点からも、ユニークであらたな知見を提示し、それらの各領域に、あたらしい展望を示唆するものである。以上の点で、本研究は、当該分野の研究領域にあらたな地平を切り開く、独創性を備えた論文である。

以上の評価をふまえ、本学位論文審査委員会は本論文を博士（人間科学）の学位に値するものと判断する。